



今求められる
総務の在り方

企業トップ
インタビュー

● 長谷川和廣さん CRI 会社力研究所 代表

何があんでも生き抜くのだという 「覚悟」を持ちちなさい

人の生死にもかわるといふ「企業再生」という仕事。世界的大企業から独立系ベンチャーまで、業種・規模を問わず二四〇〇社余りの企業再生に参画し、赤字企業の大半を立て直してきた長谷川代表は、(株)ニコンと仏エシロール・インターナショナル社の合併会社、(株)ニコン・エシロールの代表取締役時には五〇億円もの赤字を一年で黒字へ、二年目で無借金経営に大転換させ、その手腕に「もう一人のゴーン」と世界中が瞠目した。リーマン・ショック、東日本大震災と続く、未曾有の国難の中、企業も個人もどうすれば生き抜いていくことができるのか、今必要な総務の機能とは何か、長谷川さんにかがった。

私の経営術・

経営論の軸

編集部 実に多くの企業をよみがえらせた実績をお持ちの長谷川さんですが、今の日本、そして世界経済の動きをどのように見ていらっしゃいますか。

長谷川 私は今年七十二歳になります。五〇年近く、企業人として、また「再生請負人」として、世界の二四〇〇から二五〇〇社の再生事業に参画してきました。ここ三年間では、約七〇社に経営コンサルタントとし

てアドバイスをを行い、今は七社の顧問をしております。

終戦後の高度経済成長時代から、日本企業、日本経済の浮き沈みにかわりを持ってきた身からすると、一九二九年の世界大恐慌と同じ規模の不況が、今後間違いなく起きると見えています。日本という国が、これからは「日本」であり続けられるかどうかという重大な局面に突入したということですね。日本市場は縮小せざるを得ないでしょう。これは、多くの世界企業で実務家として仕事をしてきた中から、私自身が導き出した予想値でもあります。